



Title	洛星高校での取り組みについて
Author(s)	川崎, 晴香
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 83-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68186
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

洛星高校での取り組みについて

川崎 晴香

ーこれまで関わった洛星高校での授業について教えてください

最初の1年間はメンバーとして、翌年は前期のみですが代表として関わりました。

臨床哲学研究室に入ってからすぐ、オリエンテーションの日に洛星高校での活動内容を聞いて、一度行ってみようと思いました。この研究室に来る前は、人科の教育学でワークショップについて修論を書き、その前は演劇ワークショップを学校で実施する劇団のNPOで働いていました。哲学や対話活動は初めてだったのですが、1年目のテーマが男子校におけるジェンダーということで、女子校出身としての興味もありつつ参加しました。結果、洛星高校のみなさんがとても優秀で話が面白く、多様なワークを実施できそうという恵まれた環境にもひかれ、ほぼ毎回楽しく参加させてもらうことになりました。

特に印象に残っているのは、1年目後期に、私ともう1人の女性メンバー2人だけで進行した回です。こちらの人数が少なかったため、グループには分かれずにクラス全体で話し合ったのですが、彼らのジェンダーに対する考えが一気にでてきてかなり大変だと感じました。例えば、女性専用車両について「なぜ女性ばかりを優遇しなければならないのか」という考え、また雇用機会について「女性を雇うと不利になるから（もし自分が雇用主なら）雇いたくない」という意見が多く、しかもなかなか攻撃的だったので、少数の声を拾い上げるのに苦労しました。これまでこちらの進行役が男性であったことによって、彼らのそうした主張が抑えられていたことにその場で初めて気付かれました。私からは「障がい者についても同じことが言えそうですか」と最後に問いかけたのですが、真剣に聞こうという彼らの姿には誠実さを感じました。それまでも、大学院の中で女性として学ぶことについてなどよく話をしていたのですが、普段校内で関わりの少ない女性

の話をつなぐと理解しようと努めてくれているのは前から感じていました。もっと彼らのこうした本音を早くに理解できていれば、事前準備をより工夫して授業を充実させられたのでは、と思いました。同質性の高い集団で対話することの怖さを強く感じた回でもありました。

2年目の前期にまとめ役として関わったときは、皮肉にも自分が女性であるということを強く感じるようになってしまいました。生まれて初めてのことだったかもしれない、と今振り返って思っています。あまり細かく書くことはむずかしいのですが、ただただやりにくいと思いました。新しい試みを色々やってみたいと思って代表になったのですが、打合せで話し合う前からすでに決まっていることがたくさんあるように感じ、それは哲学対話そのものともつながっているように思いました。結局はチームとしてというより個々に依頼するという形で、アート系のワークショップと哲学対話をセットでおこない、ワークについての振り返りから始める形で対話を進めるようにしました。

ー今のところ、洛星高校で臨床哲学研究室は何をしているのだと言えそうですか？

現在の活動について知らないのでよくわからないのですが、自分の関わっていたものについては、実験の域をでていなかったように思います。とても授業と呼んでいいのかどうか…教育の質を保証するという考えを共有できなかった、という反省が大きいです。

ー洛星のような出前授業の出向先は「臨床」だと思うかどうかも含め、いま考えておられる「臨床哲学」というものについて教えてください。

間違いなく「臨床」だったと思いますが、上に書いたような理由で、「臨床哲学」が現場に必要なだとはとても思いにくいです。自分の知っている範囲では、現場のためというよりは、哲学のためにあるように思われました。

一洛星にかかわるなかで自身に生じた「問い」がありますか？

女性は本当に優遇されているのか、ということでしょうか。現在出産を控えているからかもしれませんが、男性中心のグループではまだまだ昔からの考えが根強いと感じられます。これは女性だけでなく、他のマイノリティについても通じることだと思うので、自分の日頃の行動から問い続けていきたいです。

(かわさきはるか)